

普遍言語の2つの相貌

——ジョン・ウィルキンズ『事物記号と哲学的言語にむけての試論』と17世紀イングランドにおける言語思想の一側面——

柳 下 壺 靖

1 はじめに

人工の言語というと何が思い浮かべられるだろうか。エスペラント、クリンゴン語、ヴォラピュクなど、いくつかが直ぐに挙げられるだろう。しかし、17世紀半ばのイングランドにおいて人工の言語を、しかも、誰もが用いることのできる普遍言語を創出しようとした人々がいたことはあまり知られていないのではないか。しかも論者によっては、そうした言語が自然の秩序を写し取り、自然の事物を正しく示すことで、自然に関するより良い知識を獲得する補助になるということも期待していたのである。加えて、そこでは既存の言語における語の多義性やあいまいさ、あるいは修辭的な言葉遣いが忌避され、プレーンな言語が称揚された。つまり、既存の言語に対する不満が背景にあり、それを払拭するものとして普遍言語は持ち出されていたのである。

本論はそうした普遍言語の構想の1つであり、ジョン・ウィルキンズという人物の手になる著作である『事物記号と哲学的言語にむけての試論 *An Essay Towards a Real Character and a Philosophical Language*』¹ (1668) (以下『試論』) を取り上げるものである。『試論』は上述のような目的を掲げた普遍言語構想の代表的かつ典型的な著作とされ、実験哲学の興隆など、いわゆる「科学革命」とも結びつけられてきた。そうした議論を踏まえたうえで、本論では『試論』における普遍言語の文法に関する議論に目を向ける。それを通じて、ウィルキンズが一方では批判している比喩や修辭的な語法が『試論』から完全には排除されていないこと、むしろそうしたものの余地が『試論』には残されていることを指摘する。いわば2つの相貌が『試論』には併存していることを示すのが本論の目的である。また、そのことが『試論』をはじめとした普遍言語構想や17世紀半ばのイングランドにおける言語にまつわる思想や実践についてどのような展望をもたらすことができるのか、ということについても論じよう。

2 普遍言語構想の概観

とはいえ、当時の普遍言語構想とはどのようなものだったのか、まずはそれを概観しよう。本論で詳しく述べることはできないが、17世紀半ばのイングランドにおける普遍言語の構想は、1630～40年代にはサミュエル・ハートリブを中心に、1650年代以降は後にロイヤル・ソサエティに関わるようになる人々を中心にしてなされ、その中で書き言葉（しばしば事物記号 *real character* や普遍的記号 *universal character* と呼ばれる）、あるいは書き言葉と話し言葉の両者を備えた普遍言語が考案されていった²。では、こうした普遍言語構想にはどのようなものがあつたのだろうか。まず、普遍言語構想は何を目指すのかという観点から大きく2つのグループに分けることができる。第1のグループは異なる言語の話者同士でのコミュニケーションを可能にする言語体系を作ることに重点を置くものであり、第2のグループはそれに加えて普遍言語による事物の正しく一義的な表示や自然の秩序の反映、および自然に関するより良い知識の獲得といった点にも重きを置くものである。

第1のグループに分類できる普遍言語構想の代表例としては、フランス・ロドウィック (1619-1694) による『共通の書字』(1648年)³が挙げられる。商人であつたロドウィックがどのような教育を受けたのかは明らかではないが、ロドウィックは40年代から普遍言語構想に携わり、『共通の書字』以外にも普遍言語構想について論じたものを出版している。

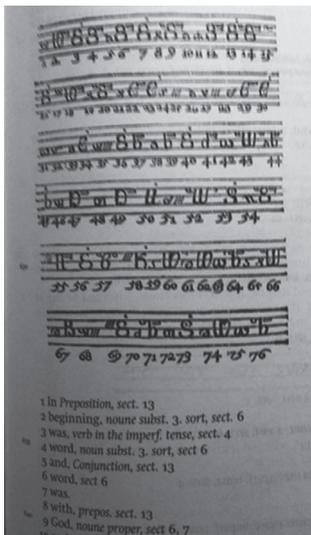


図1 Lodwick, 2011, p. 87

また、1681年にはロイヤル・ソサエティのフェローにも選ばれている⁴。ロドウィックは、自らの普遍言語によって達成されるであろうことをこのように説明している。

この書字 [で書かれた文章] が読者の用いる言語を解さない人によって書かれたものであり、その人物は自らの話す言語に則ってこの書字を用いたとしても、この書字に習熟している人物は、そこに何が書かれているのかを知るのにすでに習得している母語以外を学ぶ必要はないだろう⁵。([]内は筆者の補い)

ロドウィックが強調するのは、互いの言語を解さない人同士の間でもこの書字を学び用いることで意思疎通が可能になる、という点である。ロドウィックは英単語のそれぞれに記号を割り当て（それをロドウィックは「ヒエログリフ的な語の表示」と呼んでいる）、それらに適宜変化を加えつつ組み合わせるような仕組みの普遍言語を構想している（図1）。

そして、第2のグループの代表的な例として挙げられるのが本論の主題である『試論』である。次節からはこの『試論』の内容について触れていこう。

3 ジョン・ウィルキンズ『事物記号と哲学的言語にむけての試論』

だが、『試論』の内容に入る前に、一旦ここで本論の主要な登場人物であるところのジョン・ウィルキンズという人物について簡単にみておきたい。ウィルキンズはオックスフォード大学モードリンカレッジで教育を受け、同大学ワダムカレッジの学長とケンブリッジ大学トリニティカレッジの学長とを務めた人物である。また、当時の自然哲学や実験哲学にも深く関わっており、ロイヤル・ソサエティの創設メンバーでもあった。さらに、長きにわたって聖職者としても活動しており、優れた説教師としても知られ⁶、晩年にはチェスターの主教も務めている⁷。

さて、自然哲学者であり聖職者でもあったウィルキンズは多岐にわたる著作をもっているのだが、そんなウィルキンズが1668年に出版したのが『試論』である。『試論』は17世紀半ばのイングランドにおける普遍言語構想の典型的なものとして扱われてきた著作であり、事物や概念を詳細に数え上げて分類し、それらに記号をあてはめることを通じて普遍言語を構築することを試みるものである。

ここで『試論』の構成と内容について簡単にみておこう⁸。『試論』は第1部「プロレゴメナ」、第2部「普遍的哲学」、第3部「哲学的文法」、第4部「事物記号と哲学的言語」の全4部、約450ページからなる大部の著作であり、巻末には英語と普遍言語とを対応させる辞書が付属している。

まず、第1部「プロレゴメナ」では既存の言語と文字の起源および欠陥に関する議論がなされており、音や文字、あるいは語における不規則さや多義性、あいまいさなどが既存の言語の欠陥として指摘されている。例えば、①発音とそれを表すアルファベットが一一対応していない⁹、②多義語が「発話を疑わしくあいまいなものにしてしまう」¹⁰、③比喩や修辭的な語法によって「発話から元来の単純さが損なわれ、誤った装いが与えられてしまう」¹¹、といった点がそれで

ある。

つづく第2部「普遍的哲学」では、類-種差-種という階層的な秩序に沿った事物の分類がなされる。ここでウィルキンは「記号、あるいは名が与えられるところの事物と概念の数え上げと記述」を試みており、その結果が浩瀚な分類表としてまとめられている¹²。

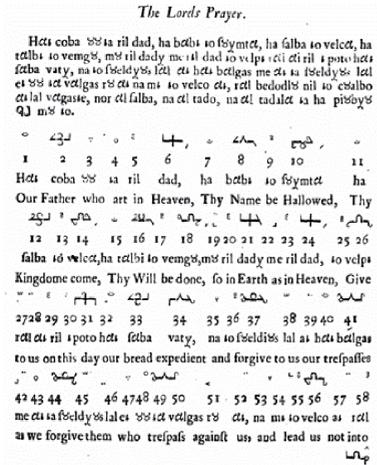


図2 Wilkins, Essay, p. 421

(図2)。そこでは記号の形式が記号の指示対象の分類上の位置を示すことができるとともに、記号が事物の本性を示すことが企図されている。

では、なぜこのような仕方では普遍言語を作ることができると考えられたのだろうか。ウィルキンは自身はどのように説明している。

人びとは同じ理性の原理において一致するのだから、内的な概念や事物の知覚においても同様に一致する。... もし人々が、同じ概念において一致すると同様に、表現の方法あるいは作法において一般的に一致することができれば、我々は言語の混乱という呪いとそれに伴うあらゆる不幸な帰結から解放されるだろう¹⁴。

人はみな同じ仕方では事物を知覚し概念を抱く。それゆえ問題はそれら事物や概念にあてはめられる記号の方にあるのであり、それを統一することができれば普遍言語は作り上げられる、というわけである。

なお、17世紀イングランドにおける普遍言語構想について網羅的に論じてい

るルイスが指摘しているように、普遍言語構想、あるいは当時の言語論の多くの背景には、アリストテレス『命題論』の議論に端を発する事物・思考・言語の関係についてのある考え方がある。すなわち、精神と世界の関係は自然的で、すべての人間に共通するのに対し、精神と言語の関係は慣習的であり、言語の差異に応じて異なる、というものである¹⁵。ウィルキンズのこの言葉遣いもそうした考えを前提にしたものといえるだろう。

4 事物を一義的に表示する言語としての『試論』

では、『試論』で提示される普遍言語を通じてウィルキンズは何を目指していたのだろうか。それに関して『試論』では以下の2点が語られている。すなわち①事物の分類と数え上げを通じた、より良き知識の獲得、および②「みせかけだけの言葉」への批判と事物の本性に沿った語の希求である。まず前者については、こう述べられている。

私は自信を持って主張する。ここでなされているように全ての事物と概念をこうした分類表の下に収めることが(分類表がなりうる限り完全なものとなれば)、未だ世の中に与えられていない真なる知識を獲得するための最も早く平明な方法であることが分かるだろう、と¹⁶。

次に、後者についてはこう語られている。

この構想は、みせかけだけの affected 言葉という偽装の下に隠れている多くの粗野な誤りを明らかにすることによって、宗教における近年のわれわれの不一致の幾分かを解消することにも貢献するだろう…。こうしたみせかけだけの言葉は、哲学的に究明され、語の真なる本性的な意味に沿って修正されることによって、実は不整合で矛盾したものであることが明らかになる¹⁷。

事物や概念の分類表を作成し、それにあいまいさなく記号を対応させることで作られる普遍言語においては、各語がそれぞれ正確に事物や概念を指示することが企図されている。つまり、この普遍言語を学ぶことはそのまま世界の事物や概念のありかたについて学ぶことになるのである。そのためには、既存の言語にみられる(比喩やレトリック、あいまいな言葉遣いといった)「みせかけだけの言葉」は排除されなくてはならない。そして、普遍言語は既存の言語が「みせかけだけ

の言葉」によって見えなくしてしまったものを明らかにするものとして位置づけられるのである。すなわち、第1部で指摘された既存の言語の欠陥を乗り越えた言語として普遍言語は描かれている。

じっさい、先行研究においても『試論』は何よりもまず事物や概念を直接かつ正確に表し、それらと言葉を一義的に対応させることを企図した普遍言語構想として議論されてきた。というよりも、17世紀イングランドにおける普遍言語構想についての議論の多くがこの点に注目してきた、という方が適切かもしれない。例えば、17、18世紀のイングランド、フランスにおける普遍言語構想について論じたノウルソンは、普遍言語の構想者は「自然の事物の多種多様な特質や、諸特質間の関係を、緻密に映し出す普遍的文字を提出しようとしていた」¹⁸と述べ、普遍言語構想の代表例の1つとしてウィルキンズを取り上げている。さらに、ウンベルト・エーコもヨーロッパにおける普遍言語の探求についての歴史を扱った『完全言語の探求』において、『試論』を「普遍的に使用される人工的な哲学的言語のための体系としてこの世紀に登場するものなかでも最も完成された体系」¹⁹と評している。浩瀚な事物の分類表を備えた『試論』は、事物や概念を一義的かつ正確に言葉と対応させることを試みる普遍言語構想の代表的事例とされてきたのである。

また、こうした視点からウィルキンズを論じる議論は、その普遍言語構想を自然哲学や実験哲学、「科学革命」とも結びつけつつ、より良い知識の獲得を可能にするものとして論じてきた²⁰。例えば、スピオンドは「自然言語はどうしてもなく混乱してしまっているので、新たな哲学的、科学的知識を伝達するための理想的な人工言語が必要だと多くの17世紀イングランドの研究者は信じていた」²¹と述べ、ウィルキンズの『試論』もそれらを秩序付けて整理することを狙っていたと主張する²²。また、ノウルソンも「整序された真正の存在を記述する言語が構築可能であることが認識されたなら、そのような計画は知識の進歩にとってますます重要になる、と考えられるようになったのである」²³と述べ、知識の増進に資するものとしての普遍言語という側面を強調している。

5 背景にある言語への不信

しかし、なぜ『試論』は上述のような目的を掲げたのだろうか。その背景には一あるいはより広く、17世紀半ばのイングランドにおける普遍言語構想の背景には一ある問題意識があった。一言で表すならば、それは「言語の危うさ」への危惧だということができるだろう²⁴。つまり、言語が（誤用されることによっ

てであれ、あるいはその本性ゆえにであれ) 人々の間でのコミュニケーションや知識の伝達、さらには学問的営為の進展を阻害しかねないということが問題視されていたのである。それがよく表れている具体例として、フランシス・ベーコンとトマス・ホッブズの議論を参照しよう。

ベーコンは『学問の進歩』や『ノヴム・オルガヌム』において、人が陥る種々の誤りをイドラと呼んでおり、そのうち言語によって人にもたらされる誤りを市場のイドラと呼ぶ²⁵。市場のイドラは、『ノヴム・オルガヌム』にてこう説明されている。

人々は会話を通じて互に関わるが、語は一般的な人々の能力に即して用いられる。それゆえ、言葉の誤った、不適切な適用が知性を驚くべき仕方で包囲してしまう。また、学ある人が時折それによって自らを守り、擁護するのに慣れ親しんできた定義や説明が物事を正しい状態に戻すこともない。代わりに、語は知性に自らを押し付け、全てをかき乱してしまい、人々を空虚で数えきれない議論と作り事へと導いてしまう²⁶。

ベーコンは、学ある人であれそうでない人であれ、語(の誤った使用、不適切な使用)によって知性が侵犯されてしまうことをここで指摘しているのである。

言語による判断の歪曲や言語の不適切な使用によってもたらされる混乱、という上述の論点は、ホッブズにも共有されている。『リヴァイアサン』第4章「発話について」においてホッブズは、心中の独白を発話にすることを可能にする語には、思考を記憶にとどめること、および思考や感情、意図を互いに伝達することを可能にするという効用があると論じている²⁷。だが、ホッブズによればそうした効用と同時に発話の濫用というものも存在する。それは、①語の意味が一定しないために、思考が誤って表現されてしまうとき②比喩的に、すなわち本来そうであるのと異なる意味で言葉を用いるとき③言葉によって、自身の意志とは異なるものを自身の意志として示すとき④(言語の本来の用途ではない) 相手を傷つけるという目的で語を用いるときに起こるのだとされている²⁸。

このように、ベーコンとホッブズは共に、語の示すものが一定しなかったり語が(比喩的な言語やあいまいな語の使用などを通じて)不適切に用いられたりすることで言語は人間にとって問題含みのものとなる、ということを指摘している。そうした事態は言語の本性によっても、また人間による言語の不適当な使用によってももたらされるのだとされているのである。

上述のような言語の危うさについての議論と並行して、17世紀半ばころのイングランドでは、プレーンな言語を求める動き、あるいはその対極にあるものとしてのレトリカルな言語への批判もあらわれてくる。その具体例をみてみよう。まず挙げられるのは、ロイヤル・ソサエティの活動である。1660年にチャールズ2世の勅許のもとに設立されたロイヤル・ソサエティは、初期の活動において言語の問題に関与している。それが英語の改良を企図した委員会の設置である。自らもロイヤル・ソサエティのフェローであったバーチの手になる『ロイヤル・ソサエティの歴史』によれば、1664年に「英語を改良するための委員会」を設置することが提言されており²⁹、1665年にはウィルキンズに対してその委員会に参加する要請も出されている³⁰。

こうした活動におけるロイヤル・ソサエティの言語への態度をよく示しているのが、トマス・スプラット（上記の委員会のメンバーでもある）による『ロイヤル・ソサエティの歴史』³¹（1667年）である。ロイヤル・ソサエティのマニフェストのような役割を担うこの書物において、スプラットはロイヤル・ソサエティが最も熱心に取り組んでいるテーマの1つとして「言表の作法」の改善を挙げている³²。どのような言表の作法が目指されるべきなのか。スプラットはこう述べる。

こうした語りの過剰さ *superfluity of talking* がもたらす有害な効果は、すでに他の技芸や職のほとんどを覆いつくしてしまっているので、良き生活とその退廃の原因を考えるならば、私は先ほど述べたことを撤回することはほとんどできないし、こう結論しないではいられない。修辭的な言葉づかい *eloquence* は、平和と良き作法にとって致命的なものとして、人々の社交空間全てから追い払われるべきだと³³。

そして、そうした語りの過剰を治癒する唯一の方法は

全ての肥大した表現や脱線、膨れ上がった話しぶりを拒否する、すなわち、人間が多く物事をそれとほぼ同じ数の言葉だけによって伝えていた頃の原初の純粹さと簡潔さへと回帰するという不断の決意³⁴

であるという。

このように、17世紀半ばのイングランドにおける知識人の空間においては、

言語がもたらしうる問題についての議論を随所にみることができる。プレーンな言語を希求する議論もそれに対する応答としてあるのだろう。そして、万人に用いることができ、万人の間での意思疎通を可能にする普遍言語の構想もまた、こうした言語の危うさに対する応答の1つとして位置づけられる。『試論』もまたそうした側面を持つことはここまでの議論から明らかだろう。

6. 『試論』のもう1つの相貌

このような背景のもと、『試論』は比喩やあいまいさを排した、語と事物が一義的に対応する言語を標榜する著作として読まれてきたし、ウィルキンズ本人も確かにそのように主張している。また、4節で論じたように、多くの普遍言語構想も同様に読まれてきた。だが、『試論』には上述のような『試論』像とは異なる姿を見せている部分がある。それが『試論』の第3部で展開される文法論（特に語形論）、具体的にはそこで導入される超越論的小辞（transcendental particle、以下 TP）という品詞に関する議論である。この TP に関する議論を検討すると、『試論』のもつ別の側面が浮かび上がることとなる。というのも、一度は批判された比喩的表現や修辭的な語法、すなわちレトリック的なものが TP を通じて『試論』へと再導入されているからである。本節では、それを指摘することで、いわば『試論』のもう1つの相貌を明らかにしよう。

まず、TP とは何か、ということについて概観しておこう。詳述することはできないが、ウィルキンズは自身の文法論において品詞を全詞 integral と小辞 particle とに大別する。大まかにいえば、単体で何らかの事物や概念を表示する全詞に小辞を付与することで語あるいは文を形成するという二元論的な構成が『試論』における普遍言語の語形論の基本となっている。全詞は「ある事物や概念全体を表示する」語³⁵とされ、名詞、副詞がここに含まれているのに対し、小辞は「自身が連結された全詞に付随し、変化させることで全詞とともに共示する」³⁶語と説明される。小辞には2種類あり、1つが文法的小辞（コピュラ、代名詞、前置詞、接続詞、間投詞、冠詞、副詞などを含む）、そしてもう1つが本論の取り上げる TP である。ウィルキンズが「これらは多くの部分において新しく、既存のどの言語においても用いられているわけではない」³⁷というように、この品詞カテゴリーはウィルキンズに独特のものである。

さて、この TP は以下のようなはたらきをするものとして説明されている。

語の文脈上の意味 acception を元々の意味 sense よりさらに一般的な表示

signification へと拡大するか、その語が元来は属していない他の範疇あるいは類との関係を示すことで、何らかの超越論的概念の観点から語に付随するはたらきをする小辞は超越論的と呼ばれる³⁸。

ウィルキンズによれば、

この超越論的小辞には 48 種類が設定されている。例えば、「もの」と名付けられた小辞が「不明瞭な Obscure」「つなぐ Binding」「創造された Created」といった全詞に付与されると、それぞれ「謎 mystery」「縄 bond やつる string」「被造物 Creature」となる³⁹。

48 種類の TP がそれぞれどのようなにはたらくのか、ということについてここで網羅的に論じることはできないが、大まかにいえば全詞に付随することでその意味合いを変化させるのが TP の役割である。では、ウィルキンズはこの TP をどのような意図のもとに導入したのだろうか。それについて、ウィルキンズは以下のように述べる。

哲学的言語においては、多義的になることを避けるため、あらゆる語は厳密に一つの意味と文脈上の意味を持つべきであり、語の意味は分類表内の位置と他の項との関係に則って限定されることになる。だが、その一方で、あいまいさを招かないままに語の意味を変化させる方法がもしあるとすれば、それは言語の豊かさや優雅さを大いに促進するだろう。語の数を少なく抑える目的と同様、こうした目的のために超越論的な記号は提案されている⁴⁰。

ここでは TP が用いられる目的として、あいまいさのないまま語の意味を変化させること、および語の数を抑えることが挙げられている。ウィルキンズによれば、こうした意味の変化は既存の言語であれば修辭的技法（比喩、提喩、換喩、アイロニーなど）や接尾辞の付加による語の合成を通じてなされるものであり⁴¹、それに類似したことを TP によって可能にできれば、TP は「語の数を大いに減らし、回りくどい言い回しを避け、発話の理解しやすさや明快さに貢献し、優雅さや意義を大いに促進するだろう」⁴²というわけである。

ここで興味深いのは、既存の言語における語の意味合いを変化させる手段として修辭的技法が挙げられている点だろう。しかもウィルキンズは、「これらのす

べてに関する多くの例を一般的な修辞学の書物のうちにみることができる。また、以下の章では、超越論的小辞に関する例を扱う中でそれらのいくつかを参照する機会があるだろう」⁴³と述べ、そうした方法を自身の普遍言語構想から排除していないのである。じっさい、数ある TP のうち第一のものとして挙げられているのが「比喩的」と名付けられた小辞である。「比喩的」小辞について、ウィルキンズはこのように説明している。

何らかの語に付与された「比喩的」の記号は、その語の意味が分類表の中で従来持たされていた厳密に限定された文脈上の意味 *acceptation* からより普遍的で包括的な意味 *signification* へと拡大されるということの意味する⁴⁴。

例えば、「根 *root*」や「道 *way*」、「光 *light*」を示す語にこの小辞が付与されると、それぞれ「原始の *original*」「方法 *means*」「明白な *evident*、平明な *plain*」を示す語となるとされる (Essay, 323, cf. Essay, 225-6)。ウィルキンズによれば、こうした「比喩」の超越論的小辞によって「一般的な比喩はその優雅さを保ったまま、あいまいさなしに正当化されるかもしれない」⁴⁵という。

こうした超越論的小辞は、普遍言語を使用する際にとくに重要な役割を担うものだろう。言語に豊かさや優雅さを与えつつ語の数を抑えるということは、実際にそれを学習し、実践的に使用するという観点に立って初めて重要性をもつ。しかし、ウィルキンズが『試論』冒頭の「献辞」において「みせかけだけの言葉 *affected phrases*」を否定していたこと、さらに第 1 部では既存の言語の欠陥として多義語が「発話を疑わしくあいまいなものにしてしまう」ことや比喩によって「発話から元来の単純さが損なわれ、誤った装いが与えられてしまう」ことなどを挙げていたのを思いかえすならば、ここでの比喩の扱いは奇妙なものに映るかもしれない。ウィルキンズは『試論』第 2 部において語と事物が正確に一対一対応する普遍言語を掲げ、第 1 部ではそれを阻害する要因として比喩や修辭的な表現を挙げていた。しかし、ここではまさにそうした比喩や修辭的表現といったレトリック的なものが普遍言語のうちに入り込む余地が残されている。『試論』はレトリック的なものを完全に排除してはいないのである。ここには、事物を正確に写し取る言語への希求がレトリック的なものをただただ抑圧するという見取り図とは異なる絵が見て取れる。たしかにウィルキンズは 5 節で触れたような言語への不信感を表明しているが、かといって言語に危うさをもたらさうような要素を『試論』から排していない。いわば 2 つの相貌が『試論』には併存している

のである。

7 『試論』からの展望

では、『試論』におけるレトリック的なものの余地という視座、あるいは2つの相貌の併存という視座から一体何を考えることができるのだろうか。最後にその展望について簡単ではあるが触れておきたい。

まず、この視座は『試論』をウィルキンズの仕事全体のうちに位置付けることを促すものとなる。例えば、レトリック的なものの余地を残した普遍言語という構想はウィルキンズの『試論』以外にほとんど見ることができないものだが、それはウィルキンズが優れた説教家であり、説教や祈祷についての手引きも出版していたような人物であったということと関わりがあるかもしれない、と考えることもできる (cf. Wood 1969 Vol.3: 968)。というのも、祈祷の手引きである『祈祷の才に関する論説 *A Discourse concerning the Gift of Prayer*』⁴⁶ (1651) (以下『祈祷の才』) において、情動と表現の関係についてウィルキンズはこのように述べているからである。

しかし、我々の情動 *affections* が表現に倣い、表現によって惹起されるということが不可避なこともあり (公の場での祈祷において、我々とともに参加する人々に関してはとくにそれが目指される)、無言の祈祷においてもそれは起こりうる。それゆえ、人は常にこの目的、すなわち情動の惹起にとって最も効果的であるような文言を前もって準備して持っていることが必要である⁴⁷。

『祈祷の才』において祈祷の言語について語るウィルキンズは、祈祷に際した具体的なアドバイスや有用な聖書の文言を様々に挙げている。

ここで目を引くのは、祈祷の目的を「情動を惹起すること」としていることである。この表現は『祈祷の才』の随所に登場する。そこでの言語使用についての議論に際しても、ウィルキンズは適切な語の選択や祈祷の簡潔さをたしかに重視している⁴⁸。とはいえ、ここにみられる表現は、『試論』の普遍言語の一面、すなわち事物とあいまいさなく一義的に対応した言語とは異なる言語を論じているもののようにもみえる。祈祷のような場でそうであるように、ある場合において言語が情動 *affection* を惹起できるものであることは必要だった。しかし、ウィルキンズは普遍言語が見せかけだけの *affected* 言葉になることも避けたかった。そ

れが『試論』に2つの相貌をもたらしたのかもしれない。このように、『試論』の2つの相貌という視座は普遍言語という枠に必ずしもとらわれずにウィルキンズの言語観を考えるきっかけになりうるだろう。

また、この視座は、普遍言語構想をより広範な領域における言語の問題と結びつけて考える端緒ともなりうるだろう。例えば、17世紀のイングランドにおいてレトリカルな言葉への批判とプレーンな言語を求める議論がなされていたこと、およびそれが普遍言語構想の背景にあったということは5節で触れたが、実はここにも『試論』と同様の二面性が見て取れる。一例をみてみよう。初期のロイヤル・ソサエティ周辺におけるレトリックの位置づけについて論じているネイトは、(5節で触れた人々である)ペーコンやスプラットなどは確かにレトリカルな言葉づかいを批判しているものの、自らもそうした言葉を用いていることを指摘している。そのうえで、批判されているのは常にあるタイプのレトリックであり、あらゆるレトリックが否定されているわけではない、とネイトは論じている⁴⁹。普遍言語構想という問題系から離れてみれば、レトリック的なものを批判しつつ採用するというのではないことではないのである。とすれば、本論で指摘した『試論』の2つの相貌という問題は、より広範な領域における言語やレトリック的なものをめぐる議論の1ケースとして考えることもできるかもしれない。そのことは、普遍言語構想を他の領域における言語をめぐる問題とこれまでとは違う仕方で接続させるきっかけにもなりうるだろう。

8 おわりに

まとめよう。『試論』はたしかに言語への不信感やレトリック的なものへの批判を踏まえており、正確であいまいさなく事物と対応する言語を掲げていたといえる。また、当時の普遍言語構想が論じられる際にもそうした点は強調されていた。だが、それに対し本論では、『試論』の文法論、特にTPに目を向けることで、それとは異なる相貌も『試論』には見いだせるということを示した。すなわち『試論』にはレトリック的なものの余地が設けられている、ということである。ウィルキンズにとって、言語に危うさを生じさせる比喩や修辭的な語法はたしかに警戒すべきものだったが、同時にただただ言語から拭い去られるべきものでもなかったのだろう。そして、そこに着目することは、『試論』をウィルキンズの仕事全体の中に位置付けて理解することにおいてだけでなく、普遍言語の問題を17世紀イングランドにおける言語論というより広い領域の中に位置付けて考えるということにおいても一つの端緒ともなるかもしれない。そのことを本論は示

峻したものである。

注

- 1 Wilkins, John. 1668. *An Essay Towards a Real Character and a Philosophical Language*, London.
- 2 17世紀イングランドにおける普遍言語構想の網羅的な歴史については、Lewis, Rhodri. 2012. *Language, Mind and Nature: Artificial Languages in England from Bacon to Locke*, Paperback Edition, first published 2007, Cambridge: Cambridge University Press. を参照。
- 3 Lodwick, Francis. 2011. *On Language, Theology and Utopia*, Felicity Henderson and William Poole eds. Oxford: Oxford University Press.
- 4 *Oxford Dictionary of National Biography* (以下 ODNB), “Lodwick, Francis”
- 5 Lodwick 2011: 69
- 6 Wood, Anthony A. 1969. *Athenae Oxonienses*, 4 Vols. Philip Blis ed. Hildesheim: Georg Olms Verlagsbuchhandlung., Vol.3, pp. 967-968.
- 7 ODNB, “Wilkins, John”.
- 8 以降では、分かりにくくなる場合を除き、ウィルキンズの著作からの引用の場合については書名の一部とページ番号のみを表記する。
- 9 *Essay*, 15-16.
- 10 *Essay*, 17.
- 11 *Essay*, 18.
- 12 *Essay*, 20.
- 13 ここで言われている etymology には語源学というニュアンスはあまり含まれていない。むしろ現在でいう形態論 morphology に近い議論であるため、語形論と訳出した。
- 14 *Essay*, 20.
- 15 Lewis, Rhodri. 2017. “The Same Principle of Reason: John Wilkins and Language”, in William Poole ed. 2017. *John Wilkins (1614-1672): New Essays*, Leiden: Brill, pp.182-198., p.187.
- 16 *Essay*, “The Epistle Dedicatory”.
- 17 *Essay*, “The Epistle Dedicatory”.
- 18 ノウルソン, ジェイムズ 1993. 『英仏普遍言語計画 デカルト、ライプニッツにはじまる』浜口稔訳, 工作舎., p. 20.
- 19 エーコ, ウンベルト 2011 『完全言語の探求』上村忠男, 廣石正和訳, 平凡社., p. 352.
- 20 cf. Maat, Jaap. 2004. *Philosophical languages in the Seventeenth Century: Dalgarno, Wilkins, Leibniz*, Dordrecht: Kluwer.
- 21 Subbiondo, Joseph L. 1992. “John Wilkins’ Theory of Meaning and the Development of a Semantic Model”, in Joseph L. Subbiondo ed. *John Wilkins and 17th-Century British Linguistics*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp. 291-306., pp. 292-293.
- 22 Subbiondo 1992: 297
- 23 ノウルソン 1993: 142
- 24 cf. Dawson, Hannah. 2007. “The Rebellion of Language Against Reason in Early Modern Philosophy”, *Intellectual History Review*, Vol. 17: 3, pp.277-290.

- 25 Bacon, Francis. 2009. *The Instauration Magna Part. II: Novum Organum and Other Associated Texts*, Graham Rees and Maria Wakely eds. Oxford: Clarendon Press., p. 80.
- 26 Bacon 2009: 80.
- 27 Hobbes, Thomas. 1960. *Leviathan*, Michael Oakeshott ed., Oxford: Blackwell., pp. 18-19.
- 28 Hobbes 1960: 19.
- 29 Birch, Thomas. 1756-57. *The History of the Royal Society of London*, Vol. I-IV, London., Vol. IV, p. 499; cf. Lewis 2012: 147-149.
- 30 Birch 1756 Vol. II: 7.
- 31 Sprat, Thomas. 1667. *The History of the Royal Society of London, for the Improvement of Natural Knowledge*, London.
- 32 Sprat 1667: 111.
- 33 Sprat 1667: 111.
- 34 Sprat 1667: 113.
- 35 *Essay*, 298.
- 36 *Essay*, 304.
- 37 *Essay*, 351.
- 38 *Essay*, 318.
- 39 *Essay*, 326.
- 40 *Essay*, 318.
- 41 *Essay*, 319.
- 42 *Essay*, 320.
- 43 *Essay*, 319.
- 44 *Essay*, 323.
- 45 *Essay*, 323.
- 46 Wilkins, John. 1651. *A Discourse Concerning the Gift of Prayer*, London.
- 47 *Gift of Prayer*, 15-16.
- 48 *Gift of Prayer*, 18-19; cf. Lloyd, William. 1672. *A Sermon Preached at the Funeral of the Right Reverend Father in God, John, Late Lord Bishop of Chester. At the Guildhall Chappel London*, London., p. 38
- 49 Nate, Richard. 2015. "Rhetoric in the Early Royal Society", in Tina Skouen and Ryan J. Stark eds. *Rhetoric and the Early Royal Society: A Sourcebook*, Leiden: Brill, pp.77-93.